

## 日本古代琴資料集成 (昭和五四年)

\*水野正好

最近、考古学の世界はおびただしい件数の発掘調査、すぐれた調査技法にさええられて重要な成果を世に送り、各分野で急激に学の深まりを見せている。そうした顕著な一分野に、日本古代音楽史・楽器史への語りかけがある。従来、こうした分野では日本・東洋音楽史の研究者からの発言が基盤となっており、古事記・日本書紀・風土記などから在り方が説かれ、正倉院や社寺に所蔵される諸楽器や人物埴輪像にともなう諸楽器を通じてその実際が示されてきている。しかし、この数年の間に、発掘調査に伴って発見される楽器の諸資料の目を眩るばかりの急激な増加により、その発生や展開、用法や系譜といった各方面について考古学の世界からも種々の見解の提示が可能となるに至った。こうした現況の中で最も重要なことは、音楽史学と考古学が緊密な連繫をとり、より注意深く資料を生かした解釈の確立をはかり、広範な諸問題を凝視することであろう。その第一歩として、考古学の世界に今日まで顕現している資料を集成し、広く提示する作業から着手することとし、まず「琴」の諸資料を掲げることにはしたい。なお、邦楽社の依頼をうけて、昭和五三年十一月末までに知見に上つていた資料については「琴歌譜以前のコト」と題して『季刊邦楽』第一八号(昭和五四年三月刊)に掲載したところであるが、調査報告書の刊行に

より数値に変化を生じた資料や詳細の判明した資料もあり、また新しく発見された資料も存在するので、昭和五四年九月末日までの全資料を総括集成することとする。

### 資料集成

発掘された日本古代琴を通観すれば、大きくは、「板作りの琴」と「槽作りの琴」に二分することができる。前者―「板作りの琴」は、一枚の板材のみで成りたつ極めて簡易な形態をとるものであり、後者―「槽作りの琴」は、琴面は一枚の板材であるが、これに共鳴槽を組み合せる複雑な構造琴の形態をとるものである。詳細に検討すれば、さらに細かく分類することも可能であり、細分を通じて琴の変遷をたどることが可能である。以下、「板作りの琴」と「槽作りの琴」に分け資料を提示したい。

**板作りの琴・第一群第一種** 全体が小づくりで比較的幅狭く長さも短い細身の形をもち、琴板の表裏とも平滑な作りの琴である。

静岡県静岡市登呂遺跡発見琴<sup>註1)</sup>が該当する(図1)。長さ四二<sup>サ</sup>、琴尾の幅一〇<sup>サ</sup>、琴頭の幅三・八<sup>サ</sup>、厚み一・一<sup>サ</sup>。琴身の幅と長さが一

対四の比率を示す小形の琴である。一見、琴尾の隅から琴頭にかけて斜めに削り落したかの観があるが、木目にそいがちに作り出した側と木目に構わず大きくそいだ一側がそうした印象を与えるのである。琴尾は側縁から作り出した両端の突起の間に四突起を容れ、六突起としている。六突起は、いま両端から内側の各一突起が太く見られるが、剣離・乾燥の影響であり、元来は似た長さ、幅を具えていたようである。琴頭は、頭端から、一側では二・五<sup>サ</sup>、他端では三<sup>サ</sup>手前で幅を狭ばめ、明確に琴尾を作り出す。音穴は琴板上になく、頭端の中央に〇・三<sup>サ</sup>幅、深さ〇・一<sup>サ</sup>の凹みを設け絃を集める配慮がなされている。琴面は平直に仕上げられているが一面は美しく滑らかであり表を想わせ、他面は粗であり不整、裏であることを暗示している。図1は実見以前の図であることをお断りしたい。材は杉とされている。板作りの琴の中では最も簡素な作りのものである。昭和一八年の発掘調査で発見され、はじめて琴<sup>一</sup>やまと琴の存在が説かれた琴である。弥生時代後期の遺例とされている。



図1

**板作りの琴・第一群第二種** 全体が小づくりで比較的幅狭く長さも短い細身の形をもち琴板の表は平滑であるが裏面に稜をたて断面を三角に仕上げる作りの琴である。

滋賀県高島郡新旭町森浜遺跡発見第一号琴<sup>(註)</sup>が該当する(図2)。長さ五四<sup>サ</sup>までが今日のこされてはいるが、旧規はいま少し長いものである。幅も一側を欠くため明瞭でないが現存部を測ると一〇・五<sup>サ</sup>、木目から見て琴頭に狭まるものであることが判る。琴尾に四本の突起を

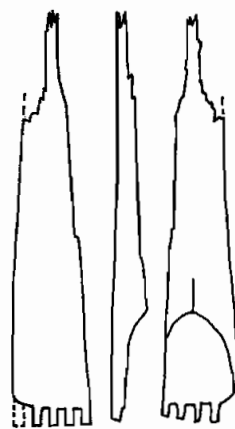


図2

のこしているが端の一角を失っていることは確実であり、また側縁の失われた部分に一角を想定すれば突起は六本であったものと考えられ、琴尾の幅はほぼ一三<sup>サ</sup>程であったことが知られる。突起の太さや傾りも登呂例より一段と整正につくられている上、弾き手の身の側ほど突起の大きさを減ずるように考慮されている。琴頭を欠くため、絃孔はたしかめられないが音穴は存在しないようである。この琴を特色づけるのは、一枚の板材から成るものの、琴面の裏側を断面三角形に瘤足を作り出している点にある。琴尾では一・五<sup>サ</sup>の厚みをもつが、この瘤足の部分では四<sup>サ</sup>の厚みがあり、差し引き二・五<sup>サ</sup>の出となり、その位置が琴尾より一八<sup>サ</sup>中央よりにあることからすれば、瘤足の形から安定の悪さはあるものの、弾き手の脚と琴裏の間に空間が得られることとなり、音響に一つの変化、音色に対する配慮を与えていることになるのである。弾き手の左側に尾部を配すると膝との関連もあり、この瘤足の隆起よりも右側(図上では上方)で弾くのである。弾き手との関係で注目されるのは、弾き手の側に寄る程、突起が短くなること、角度をひろげるといった興味ある事実である。琴面の裏面を平滑にする第一種に比べて進んだ構造であり、第一群第一種の系譜上にあり、発展したものである。古墳時代中期に属する。昭和五二年、滋賀県教育委員会が実施した発掘調査によって発見された

ものである。

兵庫県多紀郡篠山町葭池北遺跡発見琴(図3)もこの種に属する。ほぼ全形をとどめる。全長五四・三<sup>サ</sup>、琴尾幅は現存九<sup>サ</sup>、復原すれば一〇・五<sup>サ</sup>前後となる。琴尾に現在四突起を見るが、本来は五突起であったと思われる。突起は一・九、二・〇、二・五<sup>サ</sup>と順次長くつくられている。本琴は琴尾が最も広く、次第に幅を狭げ、琴頭より一〇<sup>サ</sup>程のところで側縁を大きく削り、幅をせばめる特色ある形をとっており、琴頭に絃孔を穿っている。加えて本琴は、琴尾を一<sup>サ</sup>程うすくつくり、全体の四分の一ほどの所で厚みを三・七<sup>サ</sup>に膨らませ、再び琴頭へ薄く削り上げ、琴頭で二<sup>サ</sup>弱に仕上げ、先述の滋賀県新旭町森浜遺跡第一号琴例と共通する一面をみせている、琴央より琴頭への削り上げにあたって、中央に稜をつくり断面三角形につくることも本琴の重要な特色といえるであろう。昭和五三年兵庫県教育委員会の発掘調査に際して発見されたものであり、村上絃揚・渡辺昇氏の好意で拝見し教示をえたものである。詳細は後日を待ちたい。

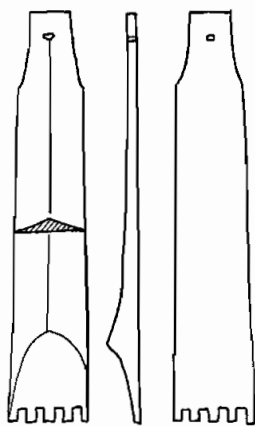


図3

板作りの琴第一群第三種 全体が小づくりで比較的幅狭く長さも短い細身の形をもち、琴板の表裏は平滑であるが、琴尾の形に変化をもつ琴である。

奈良県天理市布留遺跡発見琴<sup>(註3)</sup>が該当する(図4)。全長約四五<sup>サ</sup>、琴

頭幅四・五<sup>サ</sup>、琴央六・五<sup>サ</sup>、琴尾五・五<sup>サ</sup>。享身の幅と長さが一：七の比率を示す小形の琴である。琴板は、長方形の輪郭の両側縁の両端を削ぎ明確に琴尾、琴央、琴頭を作り出している。ただ琴尾を左に配したとき、手許にくる琴板縁の削ぎこみははっきりと深く、外側の側縁はゆるやかであり、琴と弾き手との関係で形が定められていることが判る。琴尾には、絃をうける六本の突起(現存五突起)を作り出しているが、他の諸琴と異り、突起帯全体もあらかじめ薄く削った上、抉りをいれており、突起の先端が細く鋭く丁重に整えられていることが注目される。琴身に音穴は見られないが、琴頭から一一<sup>サ</sup>程中央より、琴幅の中心に径二<sup>サ</sup>弱の半円形の一孔があり、その弧が琴頭に向き直が琴尾にむくことから、機能として絃を束ねる絃孔かと考えられるものがある。現在、調査者は琴央の絃孔から琴糸を出し琴尾の突起にソリが見られるが、調査者は琴央の絃孔から琴糸を出し琴尾の突起に結んだためのソリと想定している。この琴は昭和五三年一〇月から五四年二月にわたり天理参考館が実施した天理教教会本部礼拝場に伴う発掘調査によって発見されたものである。西方へ流れる奈良時代から平安時代の川が北に向きを変えるあたりの川底から出土し、出土層位や同伴の遺物からみて、奈良時代の琴の遺例かと考えられている。

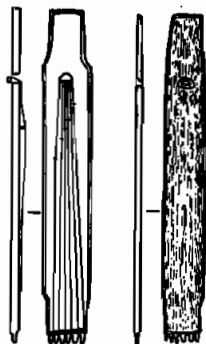


図4

板作りの琴・第二群第一種 全体が大づくりで比較的幅広く、比して長さの短い形をもち、琴板の表裏とも平滑な作りの琴である。

福岡県春日市辻田遺跡発見第三号琴<sup>(註4)</sup>が該当する(図5)。全長は八一・五<sup>サ</sup>、現存幅一五・八<sup>サ</sup>、最大の厚みは二・五<sup>サ</sup>。第一群の諸例に比べ、長、幅、厚において隔絶した法量を示している。現在、琴尾に二本の突起をのこしているにすぎないが、他の諸例と同様、六突起で復原すれば琴尾の幅は二八<sup>サ</sup>程となり、琴の真中で縦に割れ現況となつてることがよく理解できる。突起は長さ八<sup>サ</sup>、幅二・五<sup>サ</sup>と三<sup>サ</sup>、厚さ二<sup>サ</sup>を測る雄偉なものである。琴身には音穴は存在しないようであり、絃を束ねる絃もみられない。ただ絃孔は失なわれた一半に存在したかもしれず、確認は出来ない。琴身の幅に対する比率の一：二・九が示すように、幅の広さが目につく形態をとっている。報告書では、本遺例も琴の可能性あるものとして木製品七八号と番号している。昭和五三年四月、福岡県教育委員会が発掘調査を実施して、調査地の第Ⅰ区の大溝—B七区第六層上部で発見したものである。弥生時代後期の遺例である。



図5

福岡県春日市辻田遺跡第四号琴<sup>(註4)</sup>もこの種に該当するかと考えられるものである(図6)。現存の長さ四一・二<sup>サ</sup>、現存の幅一七・六<sup>サ</sup>、厚み二・二<sup>サ</sup>をはかる。長さ、幅をも欠損しているだけに旧規を窺うことはむづかしいのが、のこされている琴尾の突起状況から六突起とし

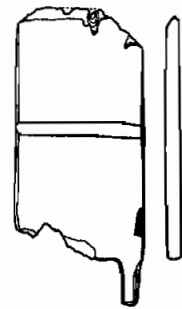


図6

て復原するならば、琴尾は三三<sup>サ</sup>幅となり、現存の幅は<sup>ハ</sup>身の二分の一をとどめていることがたしかめられるのである。全長はいま転用後の切断もあつてたしかめられないが前述の第三号琴と同様の比率、幅一に対し長さ二・九倍をあてはめれば九五<sup>サ</sup>前後になるものと想定されるが、なお短い可能性も強い。琴面は直平につくられ、現存部分には当然のことながら絃孔、音穴は見られない。絃を結ぶ突起は側縁とは区別して作り出し、長さ六<sup>サ</sup>、幅二・五<sup>サ</sup>、厚さ一・八<sup>サ</sup>。断面を楕円に仕上げる。報告書では本例を木製品第三二号と番号し琴の可能性のあるものとしている。昭和五三年四月、福岡県教育委員会が発掘調査して調査地の第Ⅰ区の大溝IC8区第六層上部で発見したものである、弥生時代後期の遺例である。

板作りの琴・第三群第一種 板作りの琴の中で形態上、特異性をもつ琴である。

千葉県木更津市菅生遺跡発見琴<sup>(註5)</sup>が該当する(図7)。はゞ完全な形をとどめる。全長六〇・九<sup>サ</sup>。全体は羽子板形の特異な形態をもち、板作りの琴の前二群とは異なる趣きをもつ琴である。柄状の琴頭は幅三・五<sup>サ</sup>。頭端を丸くまとめ、先端近くに矩形の結孔をあけ、側面に小円孔を穿って絃をまとめる構造をとっている。琴尾幅は五・三<sup>サ</sup>。薄く作られ五本の絃を結ぶ突起を作り出している。琴頭の柄部は断面半円形、また琴頭部でも柄に近い三分の一が断面半円形、琴央の三分の一

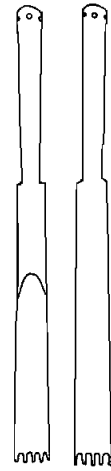


図7

上部で鋭い抉りを入れ、琴尾へ次第に薄く仕上げていく手法をとっている。この場合、絃の張られる琴面は平直であるが、裏面に抉りを設け弾く部分を薄く作り出すわけで、先の第一群第二種とした滋賀県高島郡新旭町森浜遺跡発見第一号琴をも共通する一面を見ることができるのである。形態が羽子板状で、頭部を柄状につくり、琴面をひろげる姿はハンディな機能をよく示している。琴面は幅五・三サ、長さ三八・五サ。従って比率は一：七・三となり奈良県天理市布留遺跡発見例に近似する数値をとっている。

多くの例が絃も繋ぐに六突起の制に従うのに対して本例は五突起であり、また、突起が手許ほど長く作られるなど注目すべき一面。前者は福岡県沖ノ島例に、後者は滋賀県森浜第一号琴例に共通する一が指摘できる。膝の上なり座の前に置く琴とは違い、琴尾を膝にあてがい全体をたてて奏する場合も考えられるかもしれない。いずれにせよ、一枚板の作りながら、突起や絃をまとめる孔などの構造を具えた進展の著しい重要な遺例である。板作りの琴の第一・二群からは単純に導き出すことのむつかしい形態をもち、系譜上、別箇の流れを作るのではないかと考えられるものである。昭和四八年、国学院大学を主とする管生遺跡調査団の発掘調査により、溝の中へ流入した状態で発見された。層位や伴出した遺物から見て古墳時代後期に属するものとされている。

一枚の板作りの琴と対照になるいま一つの流れの琴がある。槽―共

鳴槽をとりつけた構造琴とも呼ぶべき複雑な形の琴である。

**槽作りの琴・第一群第一種** 長大な板材を琴板とし、別作りの槽を条溝なり、楔孔、紐とじ孔でもって繋縛する琴である。

福岡県春日市辻田遺跡発見第一号琴が該当する(図8)。長さ一四八・四サ、琴尾は幅二九・四サ、琴中央部は幅二六・三サ、琴頭は幅一九・三サと三段になり、琴尾の長さは七〇サ、琴中央部は長さ五〇サ、琴頭の長さは二五・五サ、琴中央の幅は五一サ、琴尾の長さは七二サである。いずれも琴尾が長く幅広く、琴中央琴頭と三段に小さくなり、厚みも二サから一・八サと薄くなる。琴尾の突起は六本で長さ四・五サ前後、比較的幅も等しく、抉りの間隔も等しい美しい絃結びの姿を示している。両側の突起は琴面側縁を削り出すなど、板作りの琴の突起の通例とは異なる一面も見せている。琴面には琴頭と琴中央の境に「字」の絃孔が穿たれ、また琴中央と琴尾の境に音穴の円孔がのこされている。絃孔は琴軸と直交して長さ六・五サ、幅〇・二〇・六サの細長い孔をあけ中央に一・七サの切りこみを琴頭にむけ切っている。音穴は径二・二サ、丁重な円孔である。この琴にとりつけられていた槽は、琴板裏面の条溝や六ヶの小孔によって復原することが出来る。裏面の条溝は、側縁に平行して二条みられ、一条は九五サ、いま一条は九八サの長さ、それぞれ一・五―二・五サ、幅〇・九サの深さで掘り溝の磯板の嵌めこみに資している。二条の溝の間と二条の溝の首尾から一三サづつ入った間、七一サの範囲内も〇・三サ程全面に削り琴板を薄くしている。この範囲が共鳴槽の規模であろうが、共鳴槽部分も薄く仕上げ、その中央よりやや琴尾よりに音穴を設けるなど音響の調整に著しい配慮がとられている。この構造からすれば共鳴槽の規模は、内法長さ七一サ、幅一五・五サ程、面磯板の厚みは二サ前後、小口嵌板が面磯板の内側九一サのところ設けられていたことが知られるのである。

る。琴板と共鳴槽の接合には、琴板の各側縁に見られる二孔づつ二ヶ所、計四孔と中央の小孔がその用に供されたものと考えられており、各二孔は磯板を八字形に楔か木釘で打ち繋接する形、一孔は槽内側にむくよう打ちつけられたものとされている。ただ、こうした二孔一対の繋孔などに楔などを用いず樹皮でもって磯板と接ぐことも後述の服部遺跡発見琴から考えることが可能である。槽の規模なり接嵌の手法とともに注目されるのは、その位置である。槽は琴頭端、琴尾端からともに三八サの位置に小口板内面がくるように計画されており、

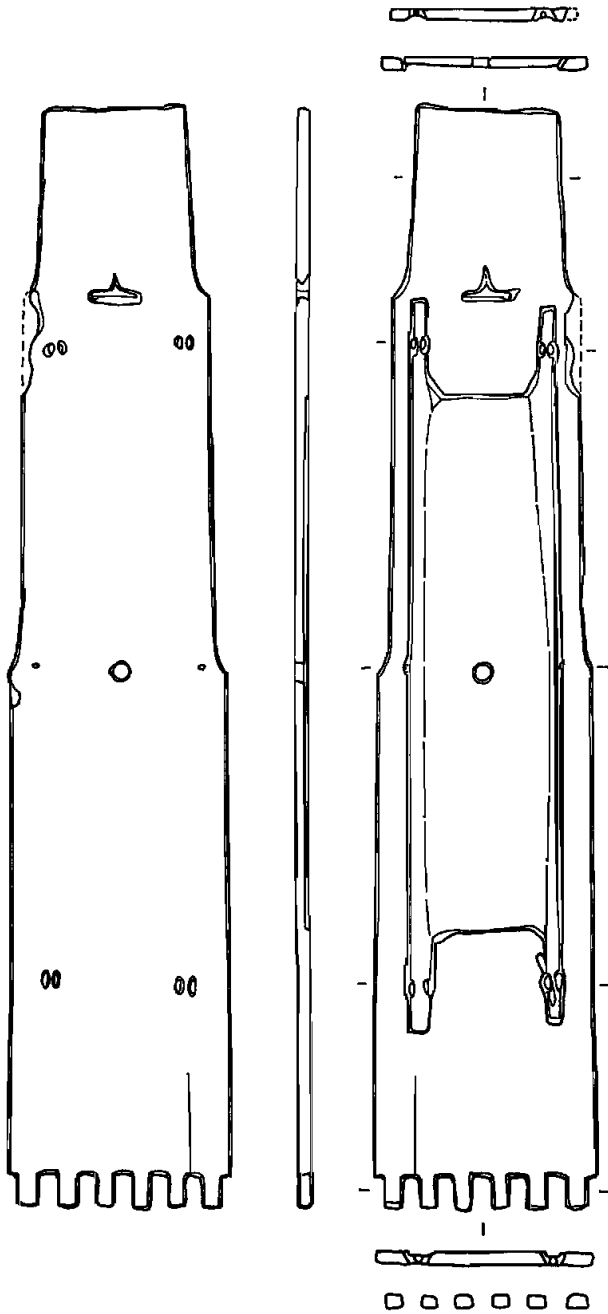


図8

琴面の正しく中央へ位置が定められ、琴頭の全ては槽外に、また琴尾の二分一も槽外に出ており、その上、槽の磯板が琴板の側縁より内側に平行して配置されるだけに琴縁も槽外に出ることとなり、小形の槽の上に大きな琴板をのせるという注目すべき形態をとることとなるのである。整正な規矩と丁重な配慮がゆきわたる琴ではあるが、そうした事実は木棺同様、磯板を溝に嵌めてむ技法をとることと相俟って古い琴形を伝えるものと考えられるであろう。この琴はモミ属の樹種から選材されている。福岡県教育委員会が昭和五三年実施した発掘調査

により調査地の第Ⅰ区の大溝―B七区第六層上部で発見したものである。層位や伴出の遺物から弥生時代後期に属するものとされている。

福岡県春日市辻田遺跡発見第二号琴<sup>(註4)</sup>もこの種に該当する(図9)。発見の時点では全長一尺、琴尾幅三三<sup>サ</sup>、厚みは側縁で一・五<sup>サ</sup>、内側

で〇・八<sup>サ</sup>をはかり、琴尾は琴頭よりやや幅広い形態をもっていたという。脆弱で現在は損壊が著しい。ただ、現存する琴尾の突起から六突起をもつ琴として幅を求めるならば二八<sup>サ</sup>の琴尾幅が復原され、全長も現存長の八七<sup>サ</sup>の内には琴尾の槽繋孔のみが見られ琴頭のそれがまだみられないこと、また琴頭の槽繋孔は琴頭端から琴尾の槽繋孔と同様三三<sup>サ</sup>以上の間隔をもつてであろうことから推測し、恐らくは一三〇<sup>サ</sup>以上の全長をもっていたことが考えられるのである。恐らくは先の辻田遺跡発見第一号琴と同じ比率―幅と長さの比が一：五―を与えらるならば一四〇<sup>サ</sup>前後となるのではないかと想われる。現存する絃を結ぶ突起は側縁とは区別して作り出し先端へ尖りをつくる丁重なもので長さ七<sup>サ</sup>、幅二・二<sup>サ</sup>、厚み一・八<sup>サ</sup>。琴面には音穴や絃孔は見られず、側縁に沿って槽を繋ぐ並置された二孔を見るのみである。槽繋孔は幅さ〇・八<sup>サ</sup>、長さ三<sup>サ</sup>で槽の磯板に垂直に穿たれている。この槽繋孔は琴尾より二八―三三<sup>サ</sup>琴央より、側縁からも四<sup>サ</sup>内側に位置しており、先の辻田遺跡発見第一号琴の槽繋孔が槽磯板の端にあることを参考にすれば、本槽の場合も槽の磯板は琴の頭、尾両端より二六



図9

サ前後の位置にまでしかなく小口板はより内側であったことが知られる。恐らく小さい槽上に、大きな槽板をのせ、条溝こそ欠くものの樹皮なり楔などで槽を繋縛したものであろう。同一遺跡で形態・繋縛技法のちがいはあるものの、小さい槽、大きい琴板という共通性が指摘されるのである。ただこの種の遺例が福岡県辻田遺跡の二例のみである現状から普遍的な在り方を示すか否かは今後の資料の増加をまたねばならないが、琴の発展系列を考える上では十分一つの種を成りたせる例示であると考えられる。琴板の樹種はスギとされている。昭和五三年、福岡県教育委員会が実施した発掘調査によって第Ⅰ区の大溝―B八区の第六層上部から発見された。弥生時代後期に属する琴である。

**槽作りの琴・第一群第二種** 長大な板材を琴板とし、別作の同規の槽を繋縛孔でもって繋縛する琴である。

滋賀県守山市服部遺跡発見琴が該当する(図10)。現存の長さ一一八<sup>サ</sup>、琴尾の幅は二九<sup>サ</sup>、厚さ一・五<sup>サ</sup>をはかる。長さはその形状や繋縛孔の位置から見て一五〇<sup>サ</sup>前後になろうかと思われる長大なものである。琴尾には側縁を削り明確に作り出した六本の突起があり、両端の二本が大きく、間の四本が小さく同形につくられている。琴面は直平であり、他例と同様、琴面に反りや曲りを与えるということは見られない。本琴の最も重要な所見は、琴面に結縛された槽部を発見した

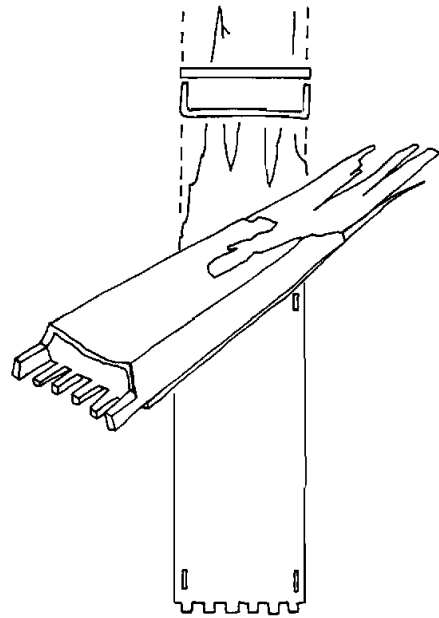


図10

事実である。槽は琴尾端から六〇センチ前後のこされており、凹字形断面の一本作りである。磯の高さは九センチ、琴面の厚みは一・五センチとされるから琴の側縁の高さは一〇・五センチ程である。槽の両側縁—磯の先端は長く太く削り出された突起となっており、一見木棺や石棺の縄掛け突起に似た作りとなっている。琴尾の両端の絃を結ぶ特に太い突起と対になっているが、結縛などはしていない。槽底は琴面にむかってもり上り彎曲しているが、土庄による変形であるのか琴本来の形態であるかは断定しえない。琴尾では琴面と槽が結縛されたのこされているものの磯板が開き気味であることからすれば本来の形ではないとすべきであろう。琴面の側縁にそい、現在細長い小孔が一孔ずつ琴尾、琴中央に穿たれているが、恐らく琴頭にもなお一孔が存在していたものと考えられ、槽の両側縁—磯にも琴面と同じ位置に対応して外から槽内に穿った細長い一孔があり、桜の樹皮で吊り結び状に結縛し、琴板と

槽を固定している。本例の発見により「槽作りの琴・第二群」の各例に見られる琴面側縁の小孔の機能が明確になったのである。なお、槽の小口面は、外底から斜めに削り、船底状に面取りしている。琴尾の槽端にあつて槽尾を塞ぐ小口—小口板は、琴面と槽が嚴重に結縛されているにもかかわらず残存しておらず、その痕跡をこどめていない。離脱したと考えるのが常識であるが、槽底が彎曲し磯が外方にひらくことをも考え合せれば元来小口板が存在しなかった場合も想定しておかねばならないであろう。いずれにせよ、第一群第一種とした辻田遺跡の二例の琴にくらべ、槽が琴面と同規であり、固定・結縛に工夫が見られる点に大きな特色があり、発展がたどれるのである。本例は、方形周溝墓の溝中に他の組物などの木製品とともにあったものであり、琴尾を溝底に、琴面を周溝の斜面にのせて発見され、従つて琴頭を失うこととなったのである。琴面が俯いて発見されたため琴柱四点が共伴するという倥幸があり、その詳細な出土位置を明確にすることによつて絃への配置なども復原され、ひいては方形周溝墓に斎らされる直前の琴柱をめぐる調律の世界が息づくのである。琴は方形周溝墓の形状や他の遺物から見て古墳時代中期に属するものと考えられる。

**槽作りの琴・第一群第三種** 長大な一材でもつて琴板と磯板を作り出し、小口、槽底を別材で作りに繋ぎする琴である。

福岡県宗像郡沖ノ島第五号祭祀遺構発見の難形金銅製五絃琴が該当する(図11)。琴尾の突起を失うため全長は不明であるが、ほぼ琴尾辺をとどめているので旧規を窺うことは可能である。琴尾より琴頭までの現存の長さは二七・一センチ、琴尾幅五・八センチ、頭幅六・五センチを測る。琴面は平直で最も幅広い琴尾から次第に幅を減じ、琴尾より一九・五センチの所までくると最も狭くなり、この位置までを槽とし、琴頭より



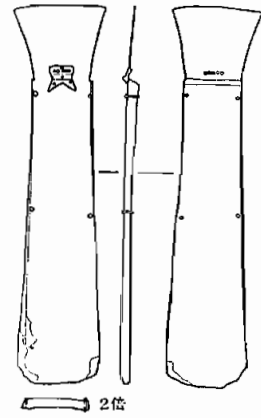


図11

龍角をとりつけている。この位置から琴面は急に撓形に大きく開き、琴頭はゆるやかな弧を描く。側面―磯は琴面の金銅板を折り曲げて作り高さ〇・八寸を測る。槽は、琴面から折り曲げられた磯の下部に槽底の一枚板の金銅板をはり鋸留め技法で固定、槽を形作っている。琴面の両側縁辺と底板両縁辺に三ヶ所ずつ一鋸が見られるのは鋸留の技法の表現である。本例のように琴面と磯を一材で作別材の槽底をあてがい槽をつくり出す例は前代にはなく、むしろ正倉院所蔵の諸琴に共通するものである。槽の小口は底板の金銅板を折り曲げて小口を塞ぐように考えられている。龍角は、琴中央に兜形の飾りを表わした一枚の金銅板を山形に折り、尾部を二鋸、頭部を一鋸でかきめ琴面にとりつけている。山形になった稜頂には五絃の絃を受けるための絃孔が五ヶ所に並列してあけられ、琴面にもあけられた五孔と重なり合うよう配慮されている。本琴は祭料として作られたものであり、元來木製の琴であったのを雛形として小形に、材も金銅製に置き換えて作り奉獻したものであるだけに、旧の規模は確定しえないものの長さ二七・一寸、琴尾幅五・八寸という法量は、五分の一なり六分の一の雛形として作られたものと考えてよいかと思われる。なお、本琴を一層

特色づけけるのは、琴自体の発見にとどまらず五点の琴柱が伴っている事実にある。遺跡は半岩陰、半露天といった祭祀の場であり、共存した金銅製容器類、雛形金銅製紡織機具など金色鮮やかな遺品から見て、またそれらが伊勢神宮や古社のものと共通する面が多いとされることからして、朝廷、ないしは極めて優れた貴紳の手になる奉養の品であること、祭祀の品であることが窺われるのである。本琴が形態上、伊勢神宮の鷗尾琴に近いと説かれるのもそうした面から見れば興味深いものと思われる。琴面から一材で作出される磯、丈の低い磯といった一面や、槽から大きく出た琴頭とその美しい形、龍角の誕生、五絃であることなど、まさに新しい動きがこの琴には現れているのである。前代の遺制をひきつぎつつ、正倉院蔵の諸琴に至る道程を見事に物語っているのである。本琴は伴出の諸遺品から見て、七世紀末葉から八世紀初葉に位置づけられるものと考えられる。

**槽作りの琴・第二群第一種** 幅は広く丈の短い琴板に、別作りの同規の槽を繋縛する琴である。長大な槽作りの琴と区別される。

滋賀県守山市赤野井遺跡発見琴が該当する。長さ七一・五寸、厚〇・八寸を測る。琴尾の幅は一四・七寸が残存し、四本の突起を見る。六本であったとすれば二九寸幅となり、幅と長さの比は一・二・五となる。突起は端のものが最も大きく作られている。琴面は平直で裏面も同様である。琴面の側縁にそい、琴頭、琴中央、琴尾の三ヶ所に細長い小孔が二孔ずつ並んで穿たれている。孔の中には桜の樹皮がのこされており、槽の磯部をこの小孔を通じて結縛していたことが考えられる。槽はのこされていないが、小孔の位置から見て琴面と同規の作りであることが理解できるが小口板などについては語りえない。現存の琴面には絃孔・音穴などは見られない。滋賀県教育委員会の発掘調査により溝中から発見されたもので、古墳時代中期に属するものとされ

ている。

滋賀県高島郡新旭町森浜遺跡発見第二号琴<sup>(註2)</sup>もこの種に該当する(図12)。長さ五二・三サ、厚さ一・一サ。いま一側縁を失い幅は確定できないが琴尾に三本の絃を結ぶ突起をのこしており、現存幅一〇サをはかるところから六本の突起として復原すれば琴尾の幅は一九サ程となり、幅と長さの比は一：二・七五となる。突起は外端のものが最も太くつくられている。絃孔や音穴などは現存の琴面には見られない。琴面は平直に作られ、裏面には側縁にそい琴尾から二、三サにわたり〇・六サの縁が一段高くなり出されている。この側縁にそい三ヶ所、長方形の繫縛孔が設けられている。琴尾・琴中央には一孔、琴頭には並列する二孔が穿たれ、琴中央の一孔には別材の木質のこされており、繫縛固定のための楔なり磯板につくられた出杓の痕跡と考えられている。現在、槽部は失なわれているで、結縛孔の状況などから推測すれば、琴面と同規の槽が固定されていたことは確実であろう。昭和五二年滋賀県教育委員会が実施した発掘調査により琵琶湖岸の低湿地から発見されたもので古墳時代中期に属するものと考えられている。



図12

滋賀県高島郡新旭町森浜遺跡発見第三号琴<sup>(註2)</sup>もこの種に属する(図13)。長さ五二・五サ、厚み一・七サ。いま一側縁も失い幅一二・七サのこされている。現在、三本の突起をのこしているが六本の突起として復原するならば琴尾の幅は二四・八サ程となるだろう。幅と長さの比は一：二・一となるう。外端の一突起のみが長く太くつくられ、次第に短く細くなるようである。琴面は直平であり、絃孔や音穴

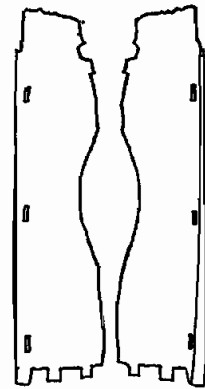


図13

は現存の琴面には見られない。琴面の裏面中央部が僅かに扶られ、〇・九サの厚みに仕上げられているという。音響の効果を考えての仕事であろう。琴面側縁にそい三ヶ所に細長い孔が一孔ずつ穿たれている。一線上に連なるだけに、一木作りの断面凹字状の槽をとりつけるための配慮であろうと想われる。この琴は昭和五二年、滋賀県教育委員会が調査を実施した際、発見したもので琵琶湖の低湿地での検出である。古墳時代中期に属するものである。

以上が発掘調査によって顕現した琴の全てである。私見は、分類群別の基準と編年配列の過程で示しえたと考えている。いずれにせよ板作りの琴、槽作りの琴が相互に関連し合い絡み合いながら展開していく様子が手にとるように読みとれるであろう。根幹ともいえるべき基本形を護りつづける琴の一群と、そこから岐れ出た枝葉とでもいうべき形を生み出す琴の一群が板作りの琴、槽作りの琴を問わず存在することともまた浮び上るのである。本稿では、古墳時代後期を彩る板作りの琴、槽作りの琴を記しえなかったが、実物の発見こそ未だないものの埴輪琴や埴輪弾琴像の膝に見る琴からその姿を恒問見ることができであろうし、こうした琴の流れのいきつく整美な姿として奈良時代の華ひらく正倉院所蔵の諸琴の世界があるのである。琴という一つの文

物にかくも多くの語りをもちえた今日の考古学に学びうる幸せをいま私がかみしめているのである。

文 献

- 註(1) 日本考古学協会編「登呂・本編」(日本考古学協会昭和二九年刊)  
 註(2) 兼康保明「古代の琴―森浜遺跡出土などの遺品をめぐって」(第一法規出版株式会社「月刊文化財」一九七七年一〇月号)  
 註(3) 生田紀明「布留遺跡だより」やまと琴」(道友社「天地」第二巻第七号 昭和五四年刊)  
 註(4) 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告・第二二集」(福岡県教育委員会 昭和五四年刊)  
 註(5) 菅生遺跡調査団「上総菅生遺跡昭和四七年度第一期調査速報」(木更津市教育委員会昭和四八年刊)。大場磐雄「菅生遺跡のやまごと」上・下(萩書房「とるめん」第一・二号 昭和四九年刊・のち「大場磐雄全集」第 巻に所収)  
 註(6) 大橋信弥「服部遺跡発見の琴」(服部遺跡調査会「波登里」第七号 昭和五一年刊、及び註(2))  
 註(7) 宗像沖ノ島遺跡調査団「宗像・沖ノ島」(吉川弘文館、昭和五四年刊)

